
2019 年

10月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下10農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

新たなブランドづくり

郡上農林■郡上花き園芸組合 夏期冷涼な気候を活かした商品づくりの支援活動

農業普及課では、中山間地の冷涼な気候を活かしたゼラニウム「ホワイトトローズ」秋作型での商品づくりの支援活動を行っている。

1カ月に3回の間隔で、草丈、葉数、芽数などの生育や肥料の養分吸収量を調査し、肥培管理について生産者に提案している。

白とピンク色の花卉を持つゼラニウムの出荷は、9月下旬から10月まで行われた。

生産者からは、「この時期のゼラニウムの出荷は珍しく、中山間地域の気候を活かした商品となっている。他の生産者も栽培を始めてほしい。」との意見が出ている。

今後農業普及課では、地域に適した管理について調査を継続し、地域内での普及のための取り組みを行うこととしている。



【ゼラニウム生育状況の様子】

恵那農林■ブロッコリー 出荷目揃え会を開催～県内産地のトップを切って出荷が始まる～

集落営農組織の経営補完品目、スイートコーンの後作品目として、産地化に取り組んできた東美濃ブロッコリーの出荷が、10月から県内産地のトップを切って始まった。

10月3日、11日に、出荷規格や品質基準の統一を図るための目揃え会を開催し、農業普及課からは生育終盤の栽培指導を行うとともに、JAひがしみのによる目揃え指導が行われた。

今年度は、5組織・2個人で、前年をやや上回る約5万株（1.4ha相当）の栽培が行われた。一部で高温・少雨による活着不良の発生が見られたものの、全体的に生育は順調に進み、心配された目揃え会直後の台風19号による倒伏被害もなかった。JA共販や直売等により11月中旬まで出荷・販売が続く。

農業普及課では、今後もJAと連携し、出荷・販売実績や栽培上の反省事項をとりまとめ、次年度に活かしていくこととしている。



【出荷目揃え会】

多様な担い手づくり

岐阜農林■スマート農業 自動運転コンバイン実演会を開催

10月17日、(農)巣南営農組合が耕作する水田にて、県の主催によりアシスト運転機能付き汎用コンバイン(通称:自動運転コンバイン)の実演会が開催された。

これは、国のスマート農業実証プロジェクトとして実施したもので、当日は農業法人や大規模稲作農家、関係機関など約50名が参加し、メーカーによる機能等の説明の後、刈取りの実演があった。

自動運転コンバインは、刈取りや旋回が自動化されオペレータは運転席で監視のみと操縦負荷が軽減されるばかりでなく、収穫と同時に収量や食味データを収集する機能もあり、良食味米生産にも繋がると期待されている。

農業普及課では、事前に収穫ほ場の生育調査や坪刈りを行い、自動運転コンバインの収量や食味データとの比較、作業性の分析等を進めている。



【実演会の様子】

中濃農林■就農応援隊 中濃就農応援隊交流会の開催

新規就農者をサポートし経営安定を図るため、J A、行政機関の他、中濃・郡上・可茂農林事務所管内の観光協会、商工会等幅広いメンバーにより中濃就農応援隊が組織されている。

10月9日に応援隊と管内の新規就農者が参加して農業研修交流施設[黒川Maruke(マルケ)]、新規就農者ハウス、農産物加工・直売所を視察した。このうち、犬山市から東白川村にIターンで新規就農して夏秋トマトに取り組む長谷川夫妻の施設への訪問では、夫妻からハウスを前にして、「生産組合代表者のアドバイスを受けながら経営拡大し、地元にも溶け込んで着実な経営を図っている」との説明を聞き、参加した管内の新規就農者も自身の経営に対するよい刺激となった。

今後も応援隊のメンバーにより新規就農者への支援を継続し、経営安定を図っていく。



【夏秋トマト視察の様子】

下呂農林■新規就農者支援（多様な担い手づくり） トマトハウス建設作業開始

「飛騨トマト研修農園 in 下呂」等の下呂市内の研修機関で2年間の研修を受講し、来年4月の就農を目指すトマト長期研修生2名のハウス建設作業が10月下旬から始まった。

研修生は、研修1年目に先輩研修生のハウス建設の手伝いを通じて基本的な作業手順を学び、手際よく作業を行っており、当日は研修受け入れ農家、先輩新規就農者をはじめ、下呂市、J Aひだ担当者、農林事務所も作業を支援した。

農林事務所では、下呂市における就農支援の取り組みや耕作放棄地発生防止に対する理解を深めることを目的に、農業普及課が窓口となり、職場研修としてハウス建設支援を行った。

現地では、4月からの栽培開始に向けてハウスの準備が進められるが、農業普及課では、新規就農者の円滑な営農開始、栽培期間中の管理作業の徹底に向け、今後も支援を継続する。



【ハウス建設支援の様子】

売れるブランドづくり

西濃農林■トマト 海津トマト部会GAP研修会を開催

海津トマト部会は、生産現場で働く人の安全性や健康管理、農地や環境の維持など、トマト生産を長く続けていく上で欠かせない課題について生産者同士で考える契機にするため、9月24、25日にGAP研修会を開催した。

当日は、既にGAP認証を受けている生産者のほ場に集まり、安全性の確保に焦点を当て、農作業に潜むリスクと対応策について検討を行った。J Aにしみのと農業普及課は、生産現場の整理整頓、事故や怪我を未然に防ぐ方法や、事故が起こった際の対処法について説明を行った。

また、海津トマト部会版GAPの作業点検シートを活用し、生産現場におけるGAPの必要性や各自で点検してもらいたい点検項目について説明し、GAPへの取り組みの理解を深めた。

今後も、GAPは「人から言われてやらされるもの」ではなく、「自らの経営を守るための手段」だということを広く生産者へ浸透させていくために、GAPの理解と取り組み推進を図っていく。



【GAP研修会の様子】

揖斐農林■いちご **3町合同2番花芽検鏡研修会の実施**

いちごの2番花の適切な管理を行うため、10月18日にJAいび川担い手サポートセンターで3町合同2番花芽検鏡研修会を開催した。今回の研修会は生産者からの意向で、3町合同の開催となり揖斐地域の組合同士の連携を深める良い機会となった。研修会では、農業共済からの施設園芸共済や収入保険制度についての説明の後、農業普及課から花芽検鏡の結果と収穫予想、今後の栽培管理について説明を行った。

今年は10月に入っても高温が続いており、温度管理や肥培管理などが難しい状況であり、今後も関係機関と連携し、技術支援を継続するとともに、いちご産地のあり方について検討を進めていく。



【研修会の様子】

可茂農林■茶 **県GAP確認を目指し、説明会を開催**

白川町の2つの茶生産組合が県GAP確認、JGAP認証を目指し、GAPに取り組んでいる。

N生産組合は69戸全員での県GAP確認を目指しており、県GAPの適合基準をクリアするため、10月13日に組合員を対象に説明会を開催し、普及指導員から制度等の説明を行った。また、JGAP認証を目指すK生産組合は、10月8日にGAPアドバイザー派遣制度を活用して、ASIGAP指導員から加工施設改修等の助言を得た。GAP取得に向け、両組合とも役員が組合員をサポートしながら熱心に取り組んでいる。

農業普及課は、これまでも加工施設及び農場管理の改善点を指導し、GAPチャレンジ推進支援事業を活用する支援も行ってきたが、今後は、内部点検の実施を支援していく。



【説明会の様子】

東濃農林■水稻 **良食味米生産を支援**

瑞浪市の営農組合で良食味米の展示ほを設置しており、農業普及課では生育調査の実施などの支援を行ってきた。3品種の展示ほで、暑い時期の登熟を避けるための田植え時期の見直しや、生育調査による葉色の状況に応じた肥料管理などの取り組みを行ってきた。昨年の展示ほの食味調査結果などで得られた知見をもとに手刈りを行い、自然乾燥後に脱穀、調製した米を米・食味分析鑑定コンクールに営農組合として出品する予定である。

農業普及課では、今後、この展示ほの結果や、昨年から実施している地域の水稻農家の栽培実態と品質・食味の関係性調査の結果をもとに、地域の良食味米栽培指針の作成につなげていく予定である。



【良食味米展示ほでの手刈り】

飛騨農林■夏秋トマト **飛騨トマト優良ほ場巡回研修を開催**

9月30日（月）、飛騨野菜出荷組合トマト部会の優良ほ場巡回研修が行われ、生産者や関係機関など72名が参加した。

優良ほ場巡回は、毎年各地区から選定された圃場の中から今年は丹生川地区と高山地区の3つの優良ほ場を巡回した。

当日は、農業普及課やJA営農指導員からはほ場の概要や見所を紹介するとともに、園主から栽培の工夫等について説明を受けた。どのほ場も着果・肥大ともに良好であり、参加者と園主と熱心に意見交換が行われ、非常に有意義な研修であった。

農業普及課では、今後も高単価が期待される秋季に、少しでも多く出荷できるよう技術指導を行っていく。



【生産者達には場の見所を紹介する普及指導員】

革新支援センター■花き 岐阜県産花き（切り花）生産販売検討会の開催

10月25日～26日、首都圏の市場2社と中卸1社を招へいし、生産者及び関係者が参集して「フランネルフラワー・ファンシーマリエ」と「バラ」の生産販売検討会を農業技術センター及び現地で開催した。

検討会では、切り花の販売情勢や本県産の評価、輸出対策などについて市場より報告と助言を受け意見交換を実施し、後半は品目毎に分かれて、それぞれの課題等について協議した。フランネル分会では、出荷状況に基づき改善点を協議するとともに、オリジナル性を生かした輸出対策への助言を受け、バラ分会では本県オリジナル品種の優位性や首都圏における販売戦略について協議した。



【フランネル分会での検討】

26日は、現地検討会として栽培ほ場4か所を訪問し、出荷調整方法の検討やオリジナル品種のPR等を実施した。今後も生産と販売の連携を強化し、本県産切り花の販売促進と花き経営の安定化を進めていく。